

「第6回 まちなかを考えるシンポジウム」開催結果報告

まちづくり部都市計画課

1 概要

▼日時 2026年3月24日（火）14時00分～16時00分

▼会場 一宮市役所本庁舎 14階1401会議室

▼参加者 90名（一般参加者：66名、市関係者：24名）

※事務局（市役所担当課、受注者、司会の14名）は除く

▼まちなかアイデアディスカッション

進行 名畑 恵（なばた めぐみ）氏

（錦二丁目エリアマネジメント株式会社 代表取締役／NPO法人まちの縁側育くみ隊 代表理事）

登壇者

大野 暁彦（おおの あきひこ）氏（名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 准教授）

出村 嘉史（でむら よしふみ）氏（岐阜大学社会システム経営学環 教授）

西村 浩（にしむら ひろし）氏（株式会社ワークヴィジョンズ 代表取締役）

2 主な発言

（1）デザイン計画の解説・補足（出村氏）

- ・ 駅から街に向けて魅力的な風景が広がり、まちなかへ導かれていくということが、どのような体験なのかということが議論され、銀座通りを対象に、車道を減少し、公園の中に入るような計画が検討された。しかし、様々な議論の結果、車で行きたいところに行けない未来は実現困難と判断された。この1年間、本町通りにおいては、商店街が気持ちよく永続的に商売をしていくためにはなにが必要か、そのためになにができるかという議論を行った。道路空間においては、店舗が屋外に出てきて、お客さんと楽しい空間を共有しやすいデザインを検討し、フラットですっきりしていて、しかも使いやすいということを目指してきた。銀座通りにおいては、緑や人の居場所が少ないなど改善の余地があるという認識で議論を行い、市から説明のあったイメージパースに至った。
- ・ 路面に限ったデザイン提案に留まっているが、これからは、沿道商店街が中心となって使っていくフェーズをきちんと実施することが重要である。

（2）本町通りのデザイン方針とこれからのに向けた補足（西村氏）

- ・ デザイン計画の内容は、行政が実施する舗装等の整備に留まっている。これだけでは、人が行き交う本町通りを実現することはできない。これから商店街が何をするか、沿道の方が道路空間を使い倒すことが重要である。みんなで道路空間を使い倒せば、ここでお店を出したい、遊びに行きたいという人は増えるはずである。
- ・ 人口減少下では店舗を開くだけでは儲からない。限界を迎えた個人戦を越えて、団体戦、商店街全体で戦わない限り、一宮から人が去っていく。もう一步、皆さんでチャレンジできたら良い。

(3) 銀座通りのデザイン方針とこれからのに向けた補足 (大野氏)

- ・周辺街路との連続性を持たせ、沿道商店の規模に合わせた小さな居場所を作るような空間整備が重要である。
- ・人が車で来ることを考えると、地下駐車場と街路が一体的で、連続性があるということが大事である。地下駐車場の出入口の屋根を払げて、夏場に日差しを避ける、冬は暖を取れるような場所とするなど、街路の一般的な整備だけではなく、地下駐車場の整備と連携して、場所ごとの特色を創出する。
- ・沿道の商店との関係づくりや、交差点で信号待ち時間を豊かにするなど、局所にしっかりした緑陰や居場所を作ることが非常に重要である。

(4) 沿道店舗のインタビューの紹介 (名畑氏)

【銀座通り】

- ・道路に緑を増やし、穏やかな時間を過ごせる居心地の良い場所にしたい。
- ・屋外から、店舗の中が見えにくいいため、表側ににぎわいの風景を作ることが大切である。
- ・利活用については、まちぐるみでは日常化しにくいいため、各店舗が使用できる日時を設定するなど、小さく気軽に使える仕組みがあると良い。

【本町通り】

- ・道は公園のような雰囲気ですっきりできるといい。
- ・場所の力も借りてお店をやっており、商店街で情報共有や一体でやっていくことが大事である。
- ・ホンマチチャレンジ (社会実験) では、店先に子どもの遊び場を展開することで、多世代共存の風景が生まれた。屋外で展開できることが重要である。
- ・商店街だからこそその価値も提供することが重要である。
- ・道路整備後は、自分たち次第であり、外部の誰かが何とかしてくれるということは、あり得ない。
- ・参道の風景が唯一無二の価値である。
- ・チャレンジを応援するムードも必要だと思う。
- ・夜間の雰囲気を良くすることも大切である。

(5) 通りの代表者からまちづくりへの期待

①一宮市本町商店街 安藤会長

- ・一宮のど真ん中には、まだ可能性があると感じた。
- ・この場所で商売がしたいと、来てくれている人たちと何かやれたらいいと思う。

②一宮市銀座通商店街振興組合 富田理事長

- ・スマートで緑が多く、木陰や座る場所も作るということを提案していただいたことに意味がある。
- ・道路整備だけではなく、地元の人たちの想いが必要という言葉が印象的だった。

(6) 登壇者や会場との意見交換

- ・ベンチを設置する場合は、座りたくなるような快適で楽しい環境をつくるのが大事である。
- ・貸してくれた空き店舗を最高の環境にし、貸したくなる状況を作ることに努力した方が良い。
- ・多少うるさくても気にならない路上のテラスの活用が、子育て世代の悩みに応えることができるのではないかと考える。

- ・街路を使い倒すという視点は、多様な人を受け入れる場所を作ることにつながる。
- ・その道に人が行き交って楽しんでる姿が一番の看板になる。
- ・車社会の象徴ともいえるラウンドアバウトを、ウォークブルなまちづくりの要素に転換するということがとても面白いし、話題になる。
- ・実現可能かどうかは一旦無視して発想してみることが大事である。
- ・自転車については、進入を許さない、制限するなど様々な対応策があるが、一律ではなく個々に細かく設定する必要があるため、街の方々の議論をしなければならない。
- ・商店街は、創業の場であり、チャレンジの場となり得る場所である。
- ・個々の店が、徹底的にプロフェッショナルを突き詰めることが商店街がモールに勝つ方法だと思う。

(7) まとめ

①西村氏

- ・住んでいる人、お店を出している人の当事者意識を持たなければ何も始まらない。
- ・自分だけ良ければいいではなく、手を組んで街を良くしようとお互いに応援する気持ちが連鎖することでエリア全体が良くなる。これが団体戦である。
- ・「人がいない」とは言わず、みんなでどうやったら一宮に来てくれるか、ポジティブに人を呼ぶ発想をしてほしい。この街にはポテンシャルもチャンスもある。日本が誇る地方都市のモデルにまでなるように、民間と行政が手を組んで取り組んでほしい。

②大野氏

- ・公共と民間、行政と市民という構造で戦うべきではない。二項対立でなく、もう一つ加えて三つの論点の中で議論をしなければ目指すべきところにはたどり着けない。
- ・一宮は、商店街があり、このようなシンポジウムがあるというのは大きなメリットである。このような場を活用して次の一歩がまた切り開ければいい。

③出村氏

- ・今回発表されたデザイン計画の中に「人中心」というものがあるが、みんなが人なので、みんなの意見を聞かなければ何もできないという状況に陥っており、「人中心」は脱却するべきではという議論が世界では起こっている。そのため、エコセントリック（環境本位）ということに着目して、みんなが生きられる、楽しめる、共有できる環境のために自分は何ができるかという考え方を都市が増えている。
- ・団体戦で何を目標とするか、そこで起こる風景をどう共有するのかが重要であり、その結果として人中心という話に戻るのが健全である。

④名畑氏（全体まとめ）※グラフィックレコーディング参照

- ・段階的に本町通りからスタートする
- ・連続する居場所とエコセントリックな風景を目指そう
- ・のんびり子育て世帯から多様な人が過ごせる工夫を（ワイヤー、屋根、ほこみちなどの制度活用）
- ・大切なのは、まちの人、沿道の当事者意識
- ・面倒でも生み出す楽しさ、顔の見える商店街を取り戻そう
- ・【誰のため】を絶えず問い続け、団体戦でデザイン計画を実現しよう

3 当日の様子

市長あいさつ



一宮まちなか未来会議 代表あいさつ



まちなかアイデアディスカッションの様子



以上